ISSN 0285-2861

ISAS ニュース

No. 35
宇宙科学研究所
1984. 2

特集　森 大吉郎先生のおもいで

森先生をしのぶ

宇宙科学研究所所長 小田　稔

新所長としてISASニュースに登場するのが前所長のおもいで特集号ということになった。

森先生にはじめてお会いしたのは昭和41年，宇宙研に着任して間もなく，初顔合せの席でだったと思う。高木，糸川，玉木先生はじめ工学の先生方，そして平尾先生ともお話したことは覚えているが，森先生は黙ってにこにこして居られたという記憶しかない。後に，無口で穏やかだが，はっきりした意見をお持ちで，芯の強い先生だということがだんだんわかってきた。

いま，色々な場面が目に浮んでくる。ラムダが分離するSBにけられてうまくいかなかったことを，自分の責任として教授会で釈明された時の辛そうなお顔。私が観測ロケットの実験主任をした頃，少し位の悪天候は無理して打ってしまう傾向があったが，ある時コントロールデスクでねばりにねばっていた私に，後からどうですやめにしませんかと，穏やかだが逆らいようのない調子で言われたこと。昨年てんま打上げの時，スケジュールがのびにのびたので，雲高を妥協してこの位ならいいにしますかと，工合悪そうに笑いながらちょっと舌を出されたこと。時々ハッとする位鋭い一言をもらされたこと。御入院後，もううつらうつらしておられたが，ある人（我々と関係の深い方ではない，念のため）のことを大変えらい人のようですよと言ったところ，「自称でしょ」とぽつりと一言，にやりとされたこと等，きりがない。

私としては，昨年春以来所の将来計画について，何度もお打合せしたことが忘れられない。予感がおありだったか，急がれた印象がある。いつも必ずしも意見が一致したわけではないが，御反対の時にも活発に反論されるのではなく，黙ってにやにやして無視されるので，何故わかって下さらぬかと腹を立てたこともあった。

今になって，そのお考えも，急がれたお気持も判ってきたような気がする。その「気」を，宇宙科学研究所の今後の発展の弾みにしたいと考えている。皆様の力強いご協力をお願いする次第である。

一言の重み

秋元春雄

「あれはどうなっていましたかナ？」
手帳片手に，時にはノーネクタイ，ジャンパー姿で，実にタイミングよく見えられた。それは進捗状況のチェックであったり，情報の収集であったり，激励であったりでした。報告なり，ご相談を申し上げている際，時にお顔をやや上向きにされ，目を細めてじっと聞かれている姿を忘れることができません。進展がはかばかしくないときは極めて適切なご指示をいただき道を拓いていただきました。胸突八丁の苦しい登り坂で喘いでいる，そんなとき一押しを幾度かしていただいた思い出があります。

「初心を忘れてはいけない」
ロケット開発研究の苦難の時代をいやというほど知りつくされておられる先生は，常に心の中に持ち続けられてきた言葉の一つではなかったかと思います。

私の心にも染みついている一言です。大分前の鹿児島県協力会保安打合会で「安全確保は常に初心にかえって……」と，惰性に溺れることを防いでいただき，以来保安打合会の都度聞かれる方々にとっては今更とか，くどいとかと受けとられるような内容まで確認や説明を申し上げるように進めてきている背景となっています。

いろいろな思い出，それは枚挙にいとまもありません。

今となりましては，ロケットを，宇宙科学研究所を，惜しみなく愛された先生のご冥福を只管お祈り申し上げるのみです。

（管理部研究協力課）

森先生のおもいで

飯盛誠一郎

私がはじめて森先生にお逢いしたのは，57年4月宇宙研に赴任した時です。挨拶に立った私に対し，柔和なお顔立ちで，眼鏡の奥からやさしいまなざしで話されたのはつい最近のようです。

そして6月初め，所長の随行ではじめてＫＳＣをおとずれましたが，丁度折からの強風で空のダイヤが乱れ，やっとのことで辿りついた私を，すでに先についておられた先生は，待ちかまえていたように早速観測所内を案内して下さり，手にとるようにくわしく説明して下さいました。正直のところその時の私は十分理解できるところまではいきませんでしたが，ロケットの研究に情熱を傾けた先生の一端をみて感服したものでした。

ＫＳＣからの帰途，わざわざ遠回りして“吾平山陵”という遺跡に案内してもらいました。「ここはウガヤフキアエズノミコトという方の御陵だそうですよ」静寂の広がる参道を先生と二人っきりで歩いた時のことも想い出されてきます。

そして昨年10月先生の最後の御出張になったのですが，全国所長会議が福岡市で開かれました。私も随行することになり，さきにＫＳＣからお出になる先生を会場でお待ちしました。「持病の神経痛が出て肩が痛くてね」といいながらも笑顔の先生がみえました。会議が終って懇親会の席でもいつものとおり歓談しておられましたが，一つも箸に手をつけられないのが気懸りでした。「福岡は鬼門でね。前にきた時悪友に誘われて飲み歩きその晩胃痛で苦しんだものです。」今にして思えばこの時にもっと苦しまれて徹底的に治療されていたら……。

奥様も仰言っておられました。「私が胃切除の経験があるものですから安心していたようです。もっとお医者様におどかされていた方がよかったかも知れません。」誠に残念で悔やまれてなりません。

心から御冥福をお祈り申しあげます。

（管理部庶務課）

森先生の想い出

池田光之

先生がＫＳＣの所長をされていたのは七・八年前の頃だったと思う。あの頃は内之浦に良く来られていた。ひと月に一回くらいの割ではなかっただろうか。何回かお一人で車で来られたこともある。あれは白いコロナだったと思うが先生の車を橋元さんが回送することになったことがある。そのとき私もちょうど東京出張が決まり神戸まで便乗させてもらった。途中橋元さんが用足ししている間に私が方向変換させようとしたら追突され先生の車に傷を付けてしまった。幸いにたいした傷ではなかったが橋元さんに話したら，「先生は近眼だからだいじょうぶだよ」と言ったのでとうとうそのまま言わずじまいにしてしまった。

それからこんなこともあった。暮もおしせまったある日，先生と秋元さんをＫＳＣの忘年会に御招待した。宴もたけなわになってくると何人かが

踊りだした。私は飲めないので踊る気にはなれず下村君と二人で先生にお酌していたら，いきなり私達二人の手を握り「おどろう」と言われて立上がられた。私達二人は踊らないわけにもいかず三人手をつないで踊ったのを覚えている。あのときの先生はほんとうに楽しそうだった。先生はもの静かな方でしたが一面賑やかなことが好きで自分のことを「森くん」と言われる等ユーモアのある方でもありました。

先生の御冥福をお祈り致します。

（KSC）

喫茶店の思い出

今沢茂夫

先生は後年酒量も上がりましたが昔はあまり飲まれませんでした。どちらかといえば甘党で，出張先でも喫茶店へはよく入りました。それも自家製のケーキのうまい店や老舗の一隅の喫茶室というところがお好きでした。秋田の「栄太楼」，鹿児島の「風月堂」，能代では「カスミ」等が懐かしく思い出されます。そんな店のなかでも能代の「カスミ」は２度にわたる改組の時や仕事の上で先生の転機となるような話を伺ったことが多く印象に残ります。

特に，昭和44年３月，構造・材料班の総力を挙げて参加したL-735(⅓)，(⅔)燃焼試験は忘れられません。昭和44年1月，L-3H-4号機の発射後11秒，補助ブースタ切離しと同時に機体が飛散するという事故がありました。この時機体の性能向上の一環としてモータケースに新材料を使用していたのでケースの信頼性が問題となり，この後予定したL-4T-1号機の１，２段の燃焼試験をすることになりました。

試験前の1日，この店でコーヒーを前にして「今度の試験でチャンバが壊れたら切腹だね」と冗談のように言われました。結果は最後まで無事に燃焼し，ほかの諸試験，細部の構造解析からも問題のないことが確認されました。

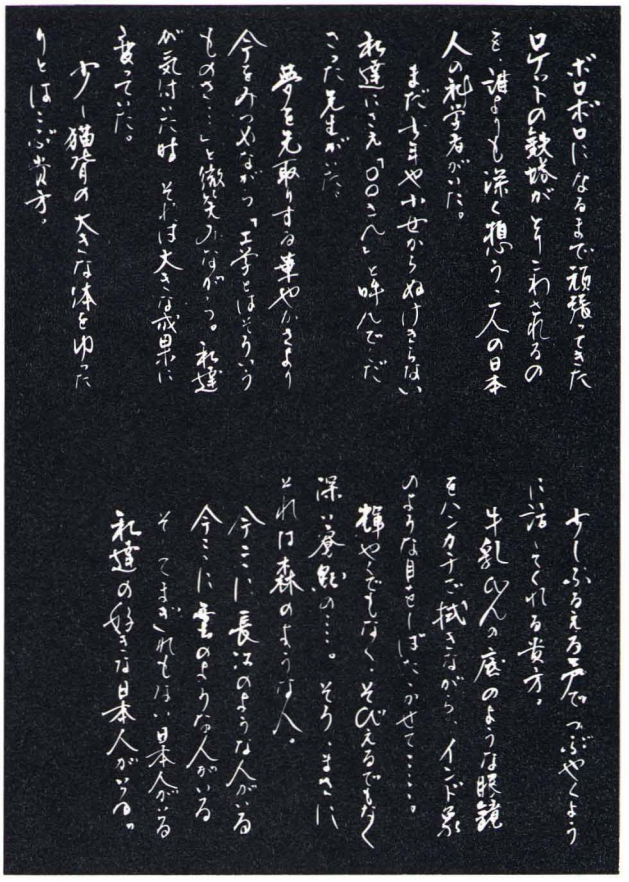
後日辞表を胸に試験に臨まれたことを知り，温顔の内に秘めた先生の強さと仕事に対するきびしさを改めて教えられました。

いつか思い出の喫茶店を訪れる機会があったらコーヒーを飲みながら先生を偲びたいと思っております。

（宇宙輸送研究系）

森先生に贈るうた

飯塚千秋


ボロボロになるまで頑張ってきた
ロケットの歴史がそこに刻まれるのを，誰よりも深く想う一人の日本人の科学者がいた。
まだまだ年やお世話からぬけきらない
森達さえ「○○さん」と呼んでだこった先生がいた。
夢を先取りする華やかさより
今をみつめながら「工学とはこういうものさ…」と微笑みながら，森達が気付く時，それは大きな成果に変っていた。
少し猫背の大きな体をゆったりとはぶく姿。
少しふるえる手でつぶやくように話してくれる姿。
牛乳びんの底のような眼鏡をハンカチで拭きながら，インド系のような目をしばしばさせて……。
輝やくでもなく，そびえるでもなく
深い憂鬱の……。そう，まさに
それは森のような人。
今ここに長江のような人がいる
今ここに童のような人がいる
そしてまぎれもない日本人がいる
森達の好きな日本人がいる。

敬老の日のタバスコ

上杉邦憲

昭和41年の初め，大学院の進路相談のため，上野の学士院講堂の舞台裏というおかしな場所で初めて森先生に御目にかかりました。その時，先生が「森君は…」と言われるので，この方は森先生ではないのかしらと思ったものでした。以来17年間，先生には口では言い表わせないほど御指導，御鞭撻をいただきました。

M-3H-1成功の直後，コントロール・センターで，「早く学位論文を書くように」と御叱りを受けたのも，先生の持論であった「ロケットの成功という見かけの成果に溺れず，基礎研究を大切に」という御考えの表われであったと思います。

御叱りを受けたと言えば一つだけ忘れられない思い出があります。実験期間中の敬老の日，50才以上の長老？を敬い，大福餅を進呈したことがありました。但しこの大福にはタバスコが仕込んであるという趣向でした。作戦は成功し，宿へ帰っ

た我々に森先生からの御返しがありました。ウイスキーが一本，そしてその箱には「年寄りをからかうものではありません　森」と書いた紙が一枚。もちろん我々一同大いに恐縮して，その晩のうちにボトルを空にしたことは言うまでもありません。

柔和さと厳しさを合わせ持たれた先生が，時々何かを言われた後でペロッと舌を出された御姿を忘れることができません。　（システム研究系）

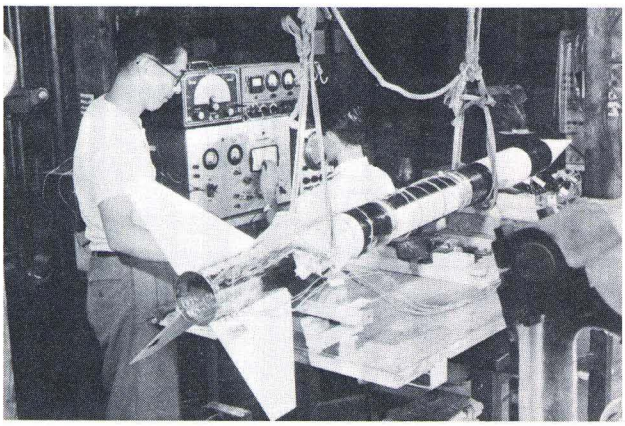
太陽系を駆けめぐる夢を

小野田淳次郎

森先生には，この15年間に，多くのことを教えられた。例えば，「100点を取ろうとしてしくじるより，80点を確実に取れ。逆に苦境にあっても80点はあきらめるな。」とも教えられたように思う。しかし，残念なことに，何時，どのような状況で教えられたのか，どうしても思い出せない。恐らく，血のめぐりの悪い弟子に，何度も繰返して教えて下さったのだろう。

昨春の退院後，先生は以前同様忙しく働かれていた。しかし，研究室で見る先生は，どこか変られたようにも思えた。急に本を出そうとおっしゃったり，御自分でワープロを操作して，ロケットの段間接手の初期から現在までの話の執筆を始められた事などもそう感じさせた一因だろう。今にして思えば，最悪の事態をも予感されて，激務のかたわら，後世に残すべき事の整理を急ごうとされていたのではと思えてならない。そんな事は夢にも思わず，先生の切迫した御仕事の手伝いの真似事をもしなかった事が，くやまれてならない。

森先生はMロケットを大変愛し，育てて来られた。病気の再発が避けられなかったにしても，せめてM-3SII型の飛翔を見て欲しかったとの思いは，関係者の変らざる気持であろう。死後の世界が眠りのようなものなら，MS-T5やPLANET-Aに乗り，太陽系を駆け巡るような，楽しい夢を見続けて頂きたい。　（宇宙輸送研究系）



K-1の振動特性テスト（S31夏・生研）

後の思いに

小島幸子

11月25日森所長は逝ってしまわれました。今だに信じられない思いが致します。

生前，所長は教訓やお説教じみた事がお好きではありませんでした。又何かの事についてごちゃごちゃと言うのもお好きではありませんでした。重大なお身体の事さえ，周囲におっしゃったのは少しでした。病院のベッドの上に寝たきりになり，左手しか動かせなくなってもそれは変わらず，最後まで淡々としておられました。多分わかっていらっしゃった御自身の死の間近いことに対して，焦心されることもなく受けとめておられるように見えました。もう少し何かおっしゃって下さったらと，私のみならず奥様ももどかしい思いをされていました。でも，何か口に出せば，それは多分遺言めいた事になって，私達を狼狽させてしまう。奥様が「長い間御苦労様でした。」と感謝の言葉を言ってあげたかったとおっしゃいましたが，やはりそれも，もう治らないことを認めてしまうことになる。全てお見透しの上で，所長として，森家の御主人として，お父様として淡々としていてくださったと思うのです。こんな事を書くと又所長に「そんな英雄的なことは嫌いだよ」と言われそうです。「後悔も未練もなしですよ」という声が聞こえてきそうです。

今はまだ思い返しますと新たな悲しみが湧いてきます。でも何年かたって，所長の生きていらした全てが，私達の後の励ましや，暖い思い出になることと信じています。　（所長秘書）

決断の人

斎藤成文

玉木さんに続いて同じ病で森さんを失った。高木，糸川両先生から引継いで，野村さんを加えた4名でロケット特別事業を進めて来た私にとって，言葉では言い表わされない悲しみと淋しさで一ぱいである。森さんは温和な眼ざしで，口数少なく黙々としてご自分の仕事を進めるというタイプであったが，同時に剛胆にして決断，実行の人であった。

忘れもしない昭和41年10月に行われたMロケット１段目の最初の飛しょう実験の時である。森さんは実験主任としてM台地の半地下M発射指令センターでロケット，ランチャの発射作業を直接指揮していた。実験成功後，私と共に山の上のコントロール・センターにいた玉木さんが感に耐えない顔付きで「森君は大した奴だよ」と私に語られた。

ロケットの火焔を外方に逃がすための火焔偏向板には多量の水を流して火焔による加熱を防ぐ様になっている。当日何らかの不備のため注水が出来ないことが発見された。にも不拘，森さんはそのまま作業を続行，予定通り発射を行ったという。そして「先生方にご心配をかけると申訳ないと思って，コントロール・センターにも報告しなかった。万一火焔偏向板やランチャが高温火焔のため損傷しても，その復旧は実験延期に比してずっと容易であることは設計した私が一番よく知っている」と淡々と話されたとのことである。

何かちょっと事が起こると「大変だ」といって騒ぐ私が，胸にしみて森さんの果断さに舌を巻いたことを思い出す。ご自分の胸一つに秘められる，そんなストレスが彼の命を短かくしたのではなかろうか。本当に惜しい友を失った。ご冥福をお祈り申し上げる。　（宇宙開発委員）

故森先生の思い出

桜井洋子

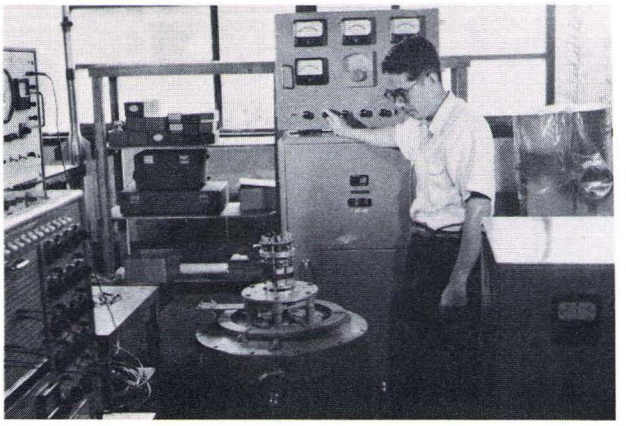
先生が亡くなられて２ヶ月が過ぎたが，今でもドアを開けて「宇宙研で一番美味しい紅茶を飲みに来た」とにこにこされながら入って来られるような気がしてならない。先生は甘い物がお好きであった。昨年御入院される前は，太り過ぎないように甘い物は奥様にとめられていると言いながらも召し上がっておられた。

亡くなられる前年であったと思うが，先生が普段と違う，特製の上衣を着ておられた。着やすそうな服ですねと言うと「長年連れ添った奥さんが作ったんだもの」とくすっと笑われ，ファッションモデルのようにポケットに手を入れられ，くるっと一回りして下さったことが，つい昨日のように思い出される。

思えば，千葉の東大生産技術研究所入所以来，仕事で御指導いただき，また助けて下さった数々の思い出は語り尽くす事は出来ない。掛け替えの無い，暖かいお人柄にふれたという事だけでも，私は幸せであったと思う。

所内を歩いておられた時，ふと「宇宙研を辞めて出て行かれた先生方が，宇宙開発関係の仕事につかれて僕等を引張っていってくれないのは寂しいね」と言われた事があった。10年以上昔の先生の呟きであったが，先生には，まだまだ10年，20年と長生きされ，引張っていって欲しかったと思うのは凡愚の愚痴であろうか。

（観測部観測管制課）



計測器の振動試験（S36・生研）

先生のほほえみ

上林房正信

何回，目をつむり直して見ても，まぶたに浮ぶのは，ほほ笑みをたたえた先生の温顔です。強いて思い出そうとしてもそれ以外の顔は浮んで来ない。もうずっと前に町協力会がすんだ後の雑談の時「東京から車で来ました」「ずっと陸路をですか」「ええ」眼鏡から見て強い近視であられると思って居たのでびっくりしました。そしてお元気だなあと思ったのはつい此の前の事の様に思えます。こんなにも早く幽明境を異にしなければならないとは誰もが全く予期もしなかった事と思います。

私はかって焼酎に親しんでいた頃，もう休んでおられるのに宿舎におしかけたことが一再ならずありました。先生は甘党で余り焼酎は好きではなかったのに。それでも浴衣でふとんの上に坐られた姿の中でも，とくにぬくもりの伝わる様な先生の笑顔しか浮んで来ません。

実験が成功して，町の婦人会から千羽鶴など持ってお祝いにかけつけると心から喜んで戴いた，と田中キミさんは述懐されます。更に「一喜一憂しない，心棒強い鹿児島県人にないものを持っておられた」と言い添えられました。又，松山助役が町の来客を案内した時，「先生方は大へん忙しい時だったのに私が案内しましょうと言って戴いた。先生は無口だが親切で誠心の人だとつくづく思っ

たんせい1号(M-4S-2)の成功（S46.2）

た」と当時の記憶を新たにします。内之浦を第二の故郷と愛して戴いた先生の魂は早速この冬の実験にも見えている事と思います。御冥福を心からお祈り致す次第であります。　（内之浦町町長）

終始笑みをたたえて

高木乙麿

森先生とは飛翔体の構造材料に高張力鋼を使用する頃からのお附き合いで25年程になる。企業の製造や研究の部門で調査開発をしていた関係上各大学や研究所等の諸先生との接触は多かったが，中でも森先生は研究者として最も尊敬していたお一人である。色々と具体的な想い出は枚挙に暇ないが短い紙面なので割愛する。昔から慎重さを表現するのに石橋を叩いて渉るという言葉があるが，先生は正にこれに当り叩いても中々渉ろうとしない位の用意周到さで研究開発はもとより，リーダーとしても宇宙研での存在は測りしれない程重要な方であった。口数も多くはなくむしろ無口と言ってよいが，心遣いは人一倍すぐれていた。研究は常に先端的な新しい学術の内容が充され，一方未知の分野にも進んで挑んでおられたけれど決して中途で諦めることなくどれも最後まであらゆる種類の研究者，技術者と接してまとめ上げられた。特にM型以降の開発で実験主任をされたロケットは殆んど完全に近い成功を収めている。又先生はリーダーとして非常に大切な対人関係についても身内と外部とを問わず世の中は凡てめぐり合いが基で人と人との縁を大事にするという真理をいつも貫いておられたように思える。先生に接して25年有余，その間終始笑みをたたえ一度も怒ったお顔も見せず大きな声も出さずいつも焦らず落ちついておられた先生が何故性急な人生を終えられたのか，私にはどうしても信じられない。

（もと三菱重工業KK，鉄鋼短期大学教授）

森先生の死を悼む

竹中幸彦

森先生は私にとっては東大航空機体学科の２年先輩であると共に，ロケット工学の大先輩でもあります。先生とは勤務場所こそ異なりますが，奇しくも私は先生とほぼ同じ専門分野の道を歩むこととなりました。そのため空力加熱を受ける機体の熱強度問題やロケット工学等について直接又は間接的に色々と教えを受けることになりました。また，先生は宇宙研のロケット研究の総帥であられると共に，宇宙開発事業団の併任理事として，事業団のロケット開発計画の推進に大きな貢献をされました。特に，Ｈ－Ｉロケット用の高性能な液体水素／液体酸素ロケットエンジン（ＬＥ-5）の開発においては，事業団と宇宙研との協力体制の確立に尽力されました。現在このエンジンの開発は順調に進み，ＬＥ-5エンジンを搭載したＨ－Ｉロケットの初号機が昭和60年度には打上げられることになりましたが，今となっては先生にその完成を御覧戴けないのが悔まれます。

我が国の宇宙開発が，いま21世紀に向って新たな飛躍をしようとするこの重要な時期に，これまでの宇宙開発をリードして来られた森先生を失った事は私達にとっては誠に大きな痛手であります。今後は先生の御意志を継いで，我が国の宇宙開発を飛躍的に発展させることが，後に残された私達の使命であると痛感します。（宇宙開発事業団）

思　い　出

戸田康明

昭和58年11月25日宇宙科学研究所長森先生が逝去された。われわれ日産自動車の技術者はロケット業務が始まって以来先生から金属材料，構造などでご指導をいただき，どれほどお世話になったか，ここに厚くお礼申し上げると共に心からおくやみ申し上げます。

私自身森先生とのおつき合いは大変古く，昭和30年ベビィロケット開発のころ，千葉にあった東大生研のボロ教室に池田先生をたづねた折に森先生を紹介された。暑い夏の日で先生は薄いシャツ一枚で振動計に試験片をはさみ実験しておられた。その姿が昨日のように思い出される。

秋田の実験にもよく参加された。仕事終了後，

町に帰ると時折白鳥というバーの左手奥が玉木，森両先生の定席となり水割りをチビリチビリやられるようになる。小生，板橋君も合流，ロケット論義が始まる。また鹿児島内之浦で実験が始まってもバー・ロケットでの先生方との一杯が楽しみであった。

なお，不思議なことに小生は玉木，森先生とも御逝去前最後の外遊をする機会をえている。

玉木先生とは御逝去の直前米国ワロップス・アイランドでNASAの方々と交遊する機会があり，森先生とは中国のロケット調査団に加わり遠くゴビの砂漠のロケットランチャの見学，最終日の上海では固体ロケットにかんして森先生と小生に質問が集中，長時間の議論がなされたのがなつかしく思い出される。

長い間ご指導有難うございました。ご冥福を祈ります。　（日産自動車KK）

“森先生のこと”

富田文治

初七日の法要の席で，宇宙研の先生方から，森先生の想い出話をお伺いした。あるお一人が“森先生は平素は温和な態度に終始されていたが，いざと言う時の剛腹さと決断力には感服しました”と具体例を挙げて述懐された。道川時代から，ロケット研究の責任者の一人として幾多の困難と修羅場をくぐり抜けて来られる中に，些少の事には動じない第二の天性を培われたのでしょうか。敢えて異を唱える積りはありませんが，しかし，先生の大学院生・助教授の頃，最も親しくして戴いた私の心の中に生きる若き日の先生は些か違っていました。一口で言えば，先生にはかなり一本気で喧嘩早い一面すらありました。その喧嘩たるや御自身でなさる分には結構でしょうが，時として代役を私がさせられました。先生曰く“自分はいざ文句を言おうとすると，舌が廻らなくなって，思う事が言えなくなってしまう，だから君に頼むんだ”と。頼まれていい気になって，公私に亘って憎まれ役を引き受けたことも屢でした。尤も，時として私と口論する際の先生には，舌が廻らなくなられた記憶がない所からすると，或は私一人が踊らされていたのかも知れません。“文(ブン)がまた失礼なことを言っている”と苦笑されている先生の柔和な顔が目に浮びます。

最も大切な先輩・友人を突然喪って一時は呆然としました，未だに信じられない気持です。30有余年に亘るお付き合いの想い出は尽きることなく脳裡に去来しますが，蛇足ついでに一つだけ……先生が昔から特に女性に対して優しかったのは万人の斉しく認める所。その優しかった先生の突然の訃報に，驚きと悲しみに打ち萎れながら，告別式の霊前に合掌していた道川時代の“Kさん”の姿に気付いたのは，遺影となってしまわれた先生と私以外にはいなかったようでした。

（もと宇宙航空研究所，宇宙開発事業団）

森大吉郎先生を偲んで

西田篤弘

ただ仰ぎ見るだけであった森先生の謦咳に親しく接することができるようになったのは，宇宙科学研究所の発足に伴って所長の補佐会という組織ができ，私も補佐の一人に選んでいただいた時からである。補佐を勤めたというと大変立派な仕事をしたように聞えるが，私に関する限り何もお役に立てたとは思えない。所長のお忙しい時間を無駄にしただけであろうと申訳なく思っている。しかし先生に所の主な問題を話していただき，それに対して質問やコメントをさせていただくのは，貴重な勉強の機会であった。森先生は聞き上手なお方で，私達に自由にしゃべらせ，心の底でじっとふるい分けておられるようであった。目をつむって話を聞いて下さっている時の御様子が目に浮かぶ。

名は体を現す，という言葉がある。福々しいお顔立ちといい，悠揚せまらざる御様子といい，森大吉郎先生はこの言葉にぴったりの方だと私はよく思った。惜しくも病に倒れておしまいになったが，Mロケット開発の主柱としての責務を全うされ，宇宙科学研究所の基盤をお築きになった森先生は，プロの工学者として大吉の星をいだき，大吉の業績をおあげになった。願わくば先生の遺志をつぐ我々が先生の大吉運を継承し，日本の宇宙

K-150型ロケットの前で（S33.4・道川）

科学に大吉の成果を次々に生み出していきたいものである。　（太陽系プラズマ研究系）

先生と私

橋元保雄

人間が宇宙をかけめぐる時代に不治の病いがあるとは残念でなりません。先生との出合いは昭和38年，内之浦の実験場です。それ以来20年間，仕事はもちろん友達の選び方から私生活の面まで御指導して頂きました。私が先生の研究室にお世話になった最初の日に，「この研究室の人達は余り運動をしないから君は運動をした方が良いよ。」とおっしゃって，野球のグローブとテニスのラケットを買い与えて頂いたことが，思い出されます。その成果は数年後，所内のソフトボール大会で，先生の目の前で満塁ホームランを打ったことです。その時，先生はニヤニヤして「橋ヤン，やるな。」とおっしゃったとか……。

当時，先生は“ルノー”と言うかぶと虫の形をした車を愛用されておられました。免許取り立てという事もあって，私が良く運転を頼まれました。

ミューロケット用新型整備塔竣工式における除幕式（S57.8・内之浦）

この車のフェンダーは，前より後の方が若干出っ張っているので，運転の未熟も手伝って，後部は傷だらけでした。そこで，日曜大工とはいきませんが，下塗りパテ，塗料，吹きつけガンを購入し，土曜日の午後，先生と塗装していたものです。先生は近眼なので少々の塗装むらは気がつかなかったようです。生研時代はこのように，のんびりと過した日々が思い出されます。

（保雄・観測部打上管制課）

14年前，私達の仲人を初めとし，多くの方々の仲人をされ，毎年一月二日には，その家族が先生のお宅に集まり，子供の成長ぶりや近況など歓談し，一日を過しておりました。今年の一月二日はポッカリ穴があいたような一日で，淋しいお正月になってしまいました。ご自分のことを“森クン”と呼び，父親のような優しさを感じていた先生の御冥福をお祈りするばかりでございます。

（ともこ）

森先生の思い出

林　友直

森先生とのお付合いは私が昭和40年に宇宙研に移って以来であるが，やがて45号館という建物が出来て偶々先生のお部屋と同じ階に居住していた関係上お目にかかる機会はかなり多かった。さらに仕事の上で鹿児島，能代，また最近では臼田などへの出張にも度々お供させて頂いたこともあって思い出は多い。

先生は口数の少ないほうであったが穏かな雰囲気の会話の楽しさは今も懐しく思い出される。しかし柔かい姿勢でかなり厳しい内容をさりげなく表現するという特技も持ち合わせておられ，血の廻りの悪い私などは大分歯がゆい思いをおさせしたのではないかと今頃気になっている。

昨年４月に手術を受けられたのちは健康人といえども過重かと思われるほどの御精励ぶりであった。夏期のロケット実験でＳ-520-6号機の回収実験にあたって私は回収船乗組員の一員となったが，森先生は雨の中を内之浦港の岸壁まで見送りに来て下さった。そのおり船の中から撮った写真の中に先生のお姿もあるが今見直してみると大へんやつれておられた御様子に胸の痛む思いがする。無事回収を了えて電話で御報告申し上げたところ，殊のほか喜んで頂いたことはまだ記憶に新しい。

私どもの多くの期待をよそに森先生が余りにも速く，駈けぬけるかの様に逝ってしまわれたことは残念の一語に尽きる。（宇宙探査工学研究系）

「てんま」(M-3S-3) の記念署名
(S58.2・内之浦)

東の空から今！優しい目で！

林　紀幸

東の空が明け始める昭和45年２月12日朝，日本初の人工衛星「おおすみ」の何周目かの受信の後，ＫＳＣコントロールセンター横に立ち，太陽の出てくる空を森先生はジッと見つめておられました。私の近づくのに気づかれ，そっと目頭を押えられたのを今思い出します。我々がロケットという目的を持ってこの仕事に携わった時から，ひたすら人工衛星にのみすべての照準を合わせ，それに到達した時，声を出して泣きたい気持でした。あれから14年，ラムダロケットから受け継いだ技術を持ったミューロケットはその成果をほしいままにしました。森先生はそのほとんどをプロジェクトマネージャーとして活躍された訳で，その都度我々に出される指示は適切で鋭いものでした。ある時トラブルが出てそれをどのように修復するか，色々の意見が出た時，私をそっと呼ばれ，「失敗を恐れてはいけない。たとえ失敗しても，それを乗り越えた時，我々には技術が残る」と言われました。それとチームワークづくりにも大変気をくばられたと思います。東大ロケットＯＢ会もその一つです。９月末に第４回ＯＢ会を行なう相談に伺った時，大変喜んで下され，「また懐しい人達に逢えますネ」とニッコリ笑われたのが私との最後となりました。今年もまた東の空に向けてミューロケットが新しい衛星を宇宙に運んで行きます。今度は宇宙のどこかから，あの優しい目で見つめて頂いているのでしょうか？

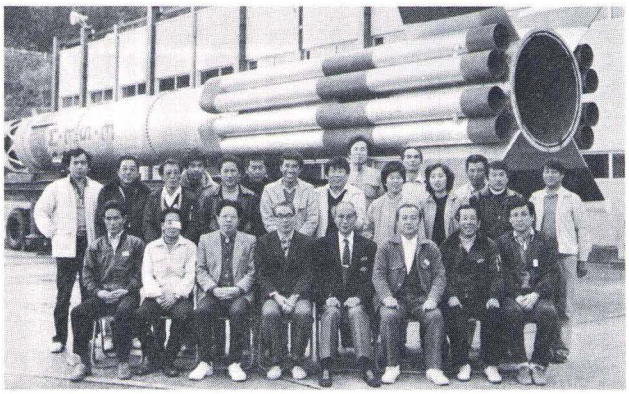
（観測部企画管理課）

先生のひと言

雛田元紀

「雛田君，無理しないように，出来る範囲でよいんだから。」アメリカに長期出張するとき先生から戴いたお言葉でした。いつものそしてとうとう最後のお言葉になって仕舞いました。学生時代からご指導戴き色々のことが思い出されますが，中でも先生に連れて行って戴いた海外旅行は忘れえぬ一つです。昭和51年春，ＮＡＳＡ各センターを３週間ほどかけて訪ねました。行く先々で事前の準備，ホテルに帰ってその日の内の整理と，先生のご几帳面な一面を身近にお見かけし，また準備・整理はかくあるべしとお教え頂きました。旅行の主目的は回収技術の調査研究で，帰国後早速回収システムの開発を行なうことになり，私をリーダにして下さり開発研究が始まりました。基礎実験の段階でいろいろとつまづき，なかなか飛しょう実験までいかず，先生のご期待に添えず，さぞ先生をやきもきおさせしていたことと想像致します。でも先生からはいつもと同じお言葉を戴き，気持も救われました。昭和56年９月Ｓ-520-4号機で回収システムの飛しょう実験が初めて成功し，やっと先生のご期待にお応えすることが出来ました。先生から過分のお言葉を戴いたことも忘れえぬ思い出になって仕舞いました。しばらく所長室のお椅子の背に飾って頂くほどの光栄に浴しました。昨年夏６号機による回収実験も無事終了し，回収技術もやっと応用の段階に入り，当初の目的を達しました。今後新しい面も取り入れ改良工夫を試みようとした矢先，先生が帰らぬ人となられ，もう二度とご指導頂けないかと思うと，何とも表わし難く，どうしようもありません。先生のお言葉を忘れず出来る範囲で最善を尽していくしかないと考えています。

（システム研究系）



ＫＳＣの職員とともに（S58.2・内之浦）

「森先生の想い出」

松尾弘毅

不肖の弟子として，胸中では数限りなくお叱りを受けていたのでしょうが，可愛がって頂いた想い出ばかりです。

はじめてお目に掛ったのは学部４年のときの就職説明会で，糸川，玉木両先生と共に当時の生研におけるロケットグループの活動を紹介されたときでした。これがきっかけで，雛田君ともどもこれまで充実した20年間を送らせていただきました。当時はＭ計画が開始された時期で，先生は総帥としてすぐれたリーダーシップをお示しになるわけですが，私もこれと深く関わるようになり何度か先生の心胆を寒からしめました。まかせた以上は黙って見守るが，必要な場面ではきわめて強気な決断をされた先生でした。

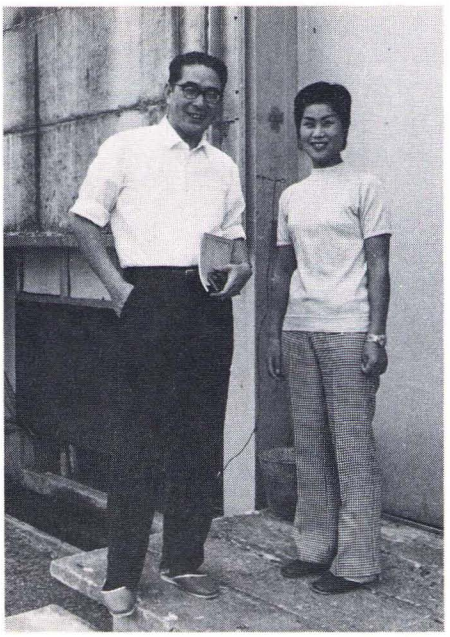
特に内之浦がお好きで，内之浦へ，神戸へと多忙な中でのご出張に「嫌いではない」というのが我々の控え目な評判でした。

綿密で，細心で，質問をされるときにも答えはご存知のことが多く我々も心したものです。ただ私も旧満州の新京で育ちましたが，「ほう君も新京かね」というやりとりを少なくとも５度は覚えており，些事はお忘れになるのか単におからかいになったのか今となってはわかりません。

昨夏「松尾君が教授とはね」とニヤッとされました。折にふれ計画主任学を身をもってお示し下さいましたが，先生の眼には松尾坊やのままお別れすることになったようです。

ご入院中，お疲れではと「先生それでは痛い所だらけじゃありませんか」「そうなんだよ」と暗黙のルールに従った会話だけでいつも早々にお暇したのが，心残りです。　（システム研究系）

宇宙研の大運動会のひとコマ（S57・10）



「しんせい」（M-4S-3）の打上げのときに（S46・9・内之浦）

大樹を失って

吉田邦子

森研究室は職場と言うよりファミリーでした。暖いファミリーでした。その長を失って約２ヶ月，今にも「吉田君」と部屋に入って来られるような錯覚におちいってしまいます。昭和37年以来ファミリーの紅一点として大切に教育され，育てていただきました。

仕事の上ではとても厳しく，また自分の研究室のことは常に第二に考え，とにかく他を大切にされていました。今では失われつつある“思いやり”のある先生でした。

これからの女性は簡単な物は自分で作らなくてはいけない，と言ってテーブルタップの作り方，半田の使い方等指導して下さったり，仕事のことで厭味を言われいじめられていると，「それぞれの分野で分を尽し一生懸命やっているのだから…」と，逆に抗議をして下さいました。

「森君がいるかぎり森研究室はあるんだ」と言っていた先生。ファミリーの長としてドジッ子の私のことがとても気がかりだったとみえ，何事につけてもバックアップして下さいました。先生と言うより父親でした。出来の悪い子供だった私は時には一人前に認めて欲しく，よく反抗をしたものでした。

世間の人より20数年遅い今一人立ちの期に立って，大樹を失った私は失ったものの大きさを，歳月の重さをひしひしと感じています。（観測部）

想い出断片

渡辺　清

「キヨシくん，ボクは病気なんだね。もう出張は疲れたよ……」

羽田でモノレールを待っている時，森先生がふとつぶやかれました。その弱々しさが妙にひっかかり，そのままとうとう私の耳から消えぬものになりました。

昨年７月，鹿児島での協力会が終り，会食をしましたが，何一つ箸をつけられませんでした。私は悲しい気持でそれを眺めるだけでしたが，明朝になって，皆の心配をあとに，内之浦へ寄られました。心から内之浦を愛しておられた先生の，これが最後の訪れとなったのです。このご出張では，まるでやり残されたことをすべて片附ける，といった勢いで精力的に動かれた結果，「疲れた…」の一言が出たのでしょう。

本当に可愛がって下さいました。Ｉさんが転勤する際の送別会の席で，私が興に乗りすぎて羽目を外した発言をした時は，斜め前の席から，「キヨシ!!」と低い声でたしなめられました。人間としての高い節度と深いやさしさを身を持って教えて下さった先生。

先生が最も愛された歌の一つに，「芸文の花咲き乱れ，思いの潮湧きめぐる……」という一高寮歌があります。森・平尾両先生の誕生パーティーを内之浦で催した際，マイクを片手に，涼やかに歌われました。その一節「……今宵は語りあかさんか……」のように，もっともっと長く私たちのそばで，語り叱り笑っていただきたかったのに…森先生は，ひどく沢山の宿題を，いつものように寡黙なままのこして，旅立たれたような気がします。

（管理部研究協力課）

還暦の二人三脚（S57.1・内之浦）

内之浦町の盆踊り（S53.7・内之浦）

故 森先生の思い出

渡会実雄

私は森先生とは鹿児島宇宙空間観測所開設以来21年のあいだ付き合いをさせていただきました。

森先生は，いつもＫＳＣに来所されたとき，管理事務所で大きな体でいつも笑顔で「鹿児島宇宙空間観測所職員の皆さんは健康状態に変りありませんか」また「内之浦町内には変わったことはないですか」とか「内之浦町地元の皆様と実験班員は何もないですか」と，いつも口ぐせのように言っておられました。森先生は本当に地元内之浦町のことは第二のふるさとの如く愛しておられたようです。

又「今日夕方は内之浦の浜辺は波が高いですかね。泳ぎが出来ますかね」と尋ねておられ，「今日大丈夫ですよ」と言うと，夕方ごろは一人で森先生の宿泊所潮見荘下の海で泳いでおられるのを見ることもありました。

内之浦町では恒例の夏祭がありますが，内之浦町の夏祭り主催者側も実験のため実験班員が内之浦に入ってくるころに合せて計画されてるようで，夏祭りの夜ＫＳＣ職員及び実験班員希望者全員浴衣姿で参加しました。中でも森先生が，馴れない手つき，ねじりはち巻でウチワを手にもち，内之浦の街路を踊り歩かれたその姿はひときわ目をひき，内之浦の町民の皆さんが拍手をおくりました。そのときの先生の喜びの顔はＫＳＣ職員又内之浦町々民の皆さんのなつかしい思い出になっています。

（KSC）

お知らせ

★人事異動

発令年月日	氏　名	異動事項	現(旧)官職
59. 1. 17	小田　稔	所長(昇任)	宇宙圏研究系教授
〃	野村民也	企画調整主幹(併任)	
〃	平尾邦雄	対外協力室長(併任)	
〃	伊藤富造	惑星研究系主幹(併任)	

公募のお知らせ

I．昭和59年度宇宙理学系の共同研究（施設利用）の公募を下記により行っております。

公募の種別：

1．スペースチェンバー（低密度プラズマ大型実験装置），高密度プラズマ発生装置

—公募テーマの種類—

a）飛しょう体搭載用観測機器の基礎開発研究および完成品の試験

b）宇宙空間プラズマのシミュレーション実験

c）宇宙空間プラズマにおける物理現象を解明するための基礎研究

2．宇宙放射線関係装置

—公募テーマの種類—

a）飛しょう体搭載用観測機器の基礎開発研究および完成品の試験

b）飛しょう体を用いた観測データのデータ処理

c）60cm光学望遠鏡（鹿児島宇宙空間観測所）

II．昭和59年度宇宙科学研究所主催のシンポジウム等の公募を下記により行っております。（但し，本所が毎年定期的に開催しているものを除く）

開催目的：本研究所主催のシンポジウム等運営規則(略)の定義によります。

所要経費：予算の範囲内において，本研究所で支出します。

開催場所：原則として，宇宙科学研究所において開催していただきます。

研究期間：昭和59年4月～昭和60年3月

申込期限：昭和59年2月24日(金)

問合せ先：研究協力課共同利用係(内線 235)

宇宙放射線シンポジウム
宇宙圏研究会　合同

・期日：昭和59年2月27日(月)～29日(水)

・場所：宇宙科学研究所68号館会議室

・問合せ先：宇宙科学研究所
研究協力課共同利用係
(467)1111（内）235

宇宙エネルギーシンポジウム

・期日：昭和59年2月29日(水)～3月1日(木)

・場所：宇宙科学研究所・45号館
1階会議室

・問合せ先：宇宙科学研究所
研究協力課共同利用係
(467)1111（内）235

編集後記

思い出はつきないと一口にいうには余りにも多くの人が多くの思い出をもっている故森先生にささげる思い出集。どなたにお願いしたらよいかとさんざん考えたあげくお願いした皆様からいただいたものはやはり変化にとんだものとなりました。「今頃になって森くんをたねにして」とどこかでそっと苦笑いされてるかもしれません。

みまかりし　君を偲びて
一杯の水割酒を　くみ交さなむ　（平尾）

ISASニュース　No.35　1984.2.　ISSN 0285-2861
発行：宇宙科学研究所(文部省)　〒153 東京都目黒区駒場4-6-1　TEL 03－467－1111
The Institute of Space and Astronautical Science